

近代日本の教育とキリスト教 (4)
明治初期・欧化主義の時代におけるキリスト者の教育活動

平沢 信康*

**Christianity in Modern Japanese Education (4)
Christian Educational Activities in the Early Westernized
Years of the Meiji Era in Japan**

Nobuyasu HIRASAWA*

Abstract

The Tokugawa shogunate carried out a policy that prohibited Christian belief through the Edo era for about two and a half centuries. Through the Meiji Restoration, Japan became a modern nation state, and the national unity was realized.

However, the new Meiji government followed this policy and continued to suppress Christians.

But the protests of Western countries were strong, and the Japanese government was forced to deregulate. Soon after the Meiji Restoration, in February 1873, the prohibition was abolished. Since then, more missionaries were sent by Christian sects from Western countries to Japan, eager to propagate Christianity.

Christianity became active in various areas of Japanese life. One of the important contribution was in the field of education. Both missionaries (mainly from America) and Japanese believers began to found many secondary schools and worked as educators.

Missionaries and foreign scholars were invited to schools in various places in Japan. They were called "oyatoi (gaikokujin) kyoushi". Generally they taught adolescents English and science. Some of them inspired Japanese young men with their virtue.

This paper describes the educational activities of Christians, especially the foundation of private schools in the westernized (called "oukashugi") days (1873-1880). Later, some of them developed into famous universities.

KEY WORDS: *Modern Japanese Education, Christianity, Educational Cultural Exchange*

はじめに

本稿では、キリスト教禁制が解除された1873年から70年代終わりまでを対象とする。この時期は、対外関係を考慮してキリスト教の信仰が黙認され始め、また「文明開化」が叫ばれて欧化主義が高

揚・流行したことから、キリスト教の教勢が拡大していった時期である。教育史的に見れば、72年に公布された「学制」期に当たる。やがてこれが79年に廃されて「教育令」が公布される。この年には元田永孚が「教学聖旨」を上申し、儒教を教学の根本にすえるべきことが強調された。翌80年、

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

前年のいわゆる自由教育令が改正され、政府の統制干渉が強化されるとともに、元田ら宮中復古派を中心とした政治勢力を背景に、修身科が筆頭教科となり、儒教主義が教育政策の中であらわに復活してくる。

こうした転換期に至るまでの時代区分において、以下、明治初期におけるキリスト教徒の教育活動を考察する。

欧米諸国のアジア進出がめざましいなか、日本は、封建社会から半封建・半近代社会へと変転し始め、明治国家は、自主独立と富国強兵を政策的に達成することを課題とした。外交団の抗議と、岩倉遣外使節団の欧米における経験から、明治政府は、73年2月24日、切支丹禁制の高札を撤去せざるをえなかった。これ以降、数多くの宣教団体が宣教師を日本に派遣し、ときには協力し合いながら、ときには競争しながら活発な伝道活動を展開する。各宣教会は、宣教本部から送られてくる費用を投じて各地に教会・学校や病院を設立し、日本のキリスト教化をめざして、地盤を築いていった。

キリスト教伝道は公然と展開されるようになり、宣教は、大阪、神戸、京都、北海道へと拡大した。幕末開港以来しだいに勢力を扶植してきたキリスト教であるが、1877（明治10年）頃には、その信者数は2千人近くになった。幕藩体制が崩壊した明治維新後まもない頃であり、人々の価値体系は非常に動揺していた。既存の秩序が崩れ、その価値の空洞化のなかで悩んでいる人たちのなかに、「文明国」の宗教たるキリスト教は進出していきやすかった。とくに、明治10年頃からキリスト教会は日の出の勢いで発展した。

開明的知識人のなかには、宣教師の説くキリスト教を、希望に満ちた未来につながる文明開化の思想として受け入れる者が少なくなかった。のちに元老院議員・東京学士院会員・衆議院副議長・貴族院議員となった津田真道1829-1903.9.3などはその代表である。美作国津山藩士の家に生まれ、伊藤玄朴に就いて蘭学を、佐久間象山に就いて洋式兵術を修め、1862年、オランダに渡ってライデン大学で法律を学んだ経歴の持ち主である。73年、

中村正直・福沢諭吉・森有礼らと明六社を組織した彼は、翌74年発行の『明六雑誌』第3号に「開化ヲ進ル方法ヲ論ス」と題してキリスト教国教論を展開、とくにプロテスタントを高く評価した。また、この欧化主義の時代には、一時は、福沢諭吉もキリスト教国教論を、加藤弘之や外山正一らもキリスト教歓迎論を唱えている。¹⁾当時、キリスト教は知識層に啓蒙思想として歓迎された。

外国人宣教師たちは、直接伝道や教会づくり、聖書翻訳、出版事業、聖職者養成といった専門的宗教教育のほかに、教育と福祉や医療などの分野でも熱心に活動した。徳川幕藩体制の崩壊が押し止められない時代の趨勢と判断した日本の知識青年たちは、蘭学、さらに開国の前後からは英学を学ぶことを機縁として、封建的教学を否定し、西欧近代の「実学」を摂取しようとした。教育内容に西洋文明を導入することは、明治期に入って、一層促進された。開明派の教育思想は、封建的教育を否定、文明開化を推進する近代的教育を主張し、儒教的価値を後退させていった。

近代学校の発展は、先ず、封建政府の外国語翻訳機関が語学校として独立することから始まり、それはやがて各種の近代学校、さらには大学へと展開していった。例えば日本の場合、番書調所→洋書調所→開成学校→東京大学（1877年）と進む過程で、多くの近代学校が分岐・設立されると同時に、その教育内容も語学中心から、語学を含む数学・物理・歴史・地理などの普通学・科学が重視されていった。²⁾

近代日本は、欧米で蓄積された知の体系や科学を導入することに励んだ。そのためには外国語の学習と教育が不可欠であった。語学教育機関、とりわけ英語学校の叢生のなかで、キリスト教系の学校が多く生まれていった。立身出世を夢見る青年が、地球上で勢力ある外国の言葉を学ぼうとすることは自然なことであった。官吏登用をねらう青年にとって、英語教育をほどこしてくれる語学教育機関が特に必要とされた。

開国後、横浜が英語研究の中心となり、いち早く来日したアメリカ人宣教師たちがキリスト教伝道に先だって英学塾を開いたことは前稿で述べ

たとおりである。72-73年には、東京に英語塾が氾濫し、英語研究は文明開化の声と共に隆盛の道をたどった。英語塾から発達したいわゆるミッション・スクール、あるいはキリスト教主義の学校は、英語を中心に教科内容の水準がかなり高かった。英語を教えた宣教師はアメリカ人が多く、日本の青年男女の精神生活に影響を与えた。これら宣教師の英学塾に学んで英語を身につけた学生の中には、明治初期の私塾経営者や教師となるものもあった。

この時期、わが国では、初等教育以上のレベルの学校体系がほとんど無秩序であるなか、西欧の学問の取り入れ口であった東京を中心として、さまざまな学校や塾が誕生した。外国語を教えるもの、法律・医学等の専門学を教えるもの、「英数漢」の普通学を教えるもの、キリスト教のミッションに支えられたものなどさまざまな形態の「私学」が展開した。これらの学校は「学校制度」の支配をほとんど受けていなかった。文部省はこれらの学校群を一元的に支配する体制を整えるには至っていなかった。いわば、混沌とした無秩序に近い状態であった。

今日のキリスト教主義大学の源泉となった学校が、当時、こうした状況下に幾つか生まれている。74年に立教学院、翌年に同志社、77年に明治学院、78年に青山学院の、それぞれの源流とみなしうる学校が設立された。キリスト教系私学は、「欧化主義の風潮に乗って順風満帆の勢いを示して発展を続け」³⁾ていく。

キリスト教主義学校は、近代日本の青年たちに欧米をダイレクトにみせてくれた。それらは、西欧世界というものを、生きた聖職者・牧師の姿により、さらに英語や聖書という媒体を通じて目のあたりにみせてくれる存在であった。⁴⁾ また、これらの学校は、英語や西洋音楽その他のいわば欧米文化の色彩を多分にもった教科目の上に特色を有していた。言うまでもなく欧化主義時代においてそれは著しかった。

キリスト教系諸学は、西洋式教育制度を最初に導入し、新しい学問の受容に開拓者的役割を果たし、西洋の文物と思想を日本の若者に紹介した。

旧時代の身分意識・階級思想を打ち破り、また女子教育を実施して男女平等思想を実践で示した。勤労精神と自主・自律思想を教え、あるいは、課外教育を通じて全人教育の新しい意義を提示した。キリスト教を奉ずる教師たちは、人生と教育の目的を、個人の栄達から社会奉仕に置き換える生き方を青少年に教えた。ミッション・スクールは、封建的人倫関係に縛られてきた日本人に、西欧近代的自我を形成するチャンスを提供し、自律的な人格陶冶を通じて新しい人生観と世界観を育むことのできる道を差し示そうとした。

しかし他方で、明治11年秋の地方巡幸の後に明治天皇が次のように語らざるを得ないほど、欧化主義の弊害もまた醸し出されていた。「輓近専ラ知識才芸ノミヲ尚トヒ文明開化ノ末ニ馳セ・・・

(中略) ・徒ニ洋風是競フニ於テハ将来ノ恐ル所、・・・昨秋各県ノ学校ヲ巡覧シ生徒ノ芸業ヲ驗スルニ・・・甚キニ至テハ善ク洋語ヲ言フト雖トモ之ヲ邦語ニ訳スル事能ハス」(「教学大旨」)

これによって、当時の「文明開化」なるものが、軽佻浮薄な傾向と無縁ではなかったことがうかがえよう。

この時期においてすでに、宣教師による女子教育への貢献は大きく、わが国において開拓的役割を演じたが、紙数の関係で、キリスト教系女学校の設立についての1節は次稿にまわさざるをえなかった。

第1節 各派の学校設立活動

この時期、外国の伝道会または外国教会の伝道局により人的・財的に経営されるミッション・スクールが叢生し始める。とくにアメリカのプロテスタント諸派の教育事業が活発であった。最初に、まずアメリカ長老教会にふれよう。

アメリカ長老教会 Presbyterian Church in the United States は、1620年代以降、アメリカの清教徒が組織したカルヴァン主義の教会である。教会政治上の論争により、カンバーランド長老キリスト教会(1810)やアメリカ南長老教会(61)が分立したが、アメリカにおける長老派の一大教派である。ウェストミンスター信仰告白を教義の標準と

している。日本伝道にあたっては、改革派およびアメリカン・ボードとならんで最も大きな影響を与えた。ヘボンをはじめ、タムソン, D, ルーミス, H, ワデル, H, インブリー, W. M.ら初代の有力な宣教師に、この派の外国伝道局から派遣された者が多い。改革派の宣教師団とともに長く一致教会（日本基督教会）と協力し、横浜バンドと呼ばれる教会形成の一団を生み出す母体となった。

同教会宣教師バラ Ballagh, John Craig 1842-1920は、兄のバラ, J. H.に招かれて72年来日、ニュージャージー州で15年間中学教師を勤めた経験を活かし、兄に代わって高島嘉右衛門創立の高島学校監謝塾で英学を教えたが、73年に学校が火災のため廃校となったため、ヘボン塾に迎えられた。ヘボンから居留地39番の建物を譲られ、ヘボン塾の運営を担当した。同塾はバラ学校とも呼ばれたが、77年の東京一致神学校の開設にともない、同校に転ずる者が生じ、またバラの病気のためもあり、経営が困難となった。⁵⁾ 植村正久は、バラの私塾に学ぶうちにキリスト教にふれ、73年5月横浜公会でバラから受洗している。彼は、まもなく伝道を決意し、ブラウン塾、東京一致神学校に学んだ。

ブラウン塾とは、横浜でブラウン, S. R. が1873（明治6）年8月、修文館を辞して山手211番の自宅に開いた家塾である。この塾は英語を教えるだけでなく、最初から伝道者を養成することを目的として設立された神学塾であった。日本基督公会の信徒たちを集めて、伝道者の養成に努め、彼の門下からは幾多の俊秀が輩出した。本多庸一、植村正久、押川方義、井深棍之助など、日本キリスト教界の初期の指導者たちは皆この塾に学んだといつてよい。「横浜バンド」と呼ばれる人々は、ここに集まった有為の青年学生をさす。ブラウン塾はヘボン塾とともに明治学院の源流の一つをなす。74年から79年まで新約聖書翻訳委員会委員長として、ブラウンは聖書の翻訳に携わったが、病を得て完成前に帰米した。

76年5月、アメリカ・オランダ改革派、アメリカ長老教会、スコットランド一致長老教会の日本にある宣教師団の間に合同の議が起こった。同時

に日本基督公会と日本長老教会との合同の議があり、協議を重ねた結果、ついに上記3ミッションの一致合同による日本基督一致教会が生まれた。その第一回中会が77年10月3日、横浜の海岸教会で開かれた。協力3ミッションは、東京築地明石町に東京一致神学校 Union Theological Seminary, Tokyo を設立して日本人教職者を養成することとした。正式決定に先立つ77年9月、授業を開始した。学生は3ミッションの宣教師らのもとに聖書および神学を学んでいた者が中心であった。学校は3ミッション協議会の管理下に置かれ、専任教師は各ミッションの指名によることとし、専任教師が学校運営の責任を負った。最初の専任教師は改革派からアメルマン, J. L., 長老教会からインブリー, W. M., スコットランド一致長老教会からはマクラレン, S. G.（旧約歴史、地理）であり、講師としてフルベッキ, G. H. F. とタムソン, D. が選ばれた。明治学院は、東京一致神学校の創立を同校の原点としている。この学校は、明治初期の日本プロテスタント・キリスト教界を背負って活躍した多数の優れた人材を世に送り出す。

アメリカ・オランダ改革派教会宣教師のアメルマンは、ニューヨーク州ロングアイランド出身で、1862年ニューヨーク大学、68年ニューブランズウィック神学校を卒業した。ニュージャージー州ジャージーシティーのオールド・ベルガン改革派教会を牧し、76（明治9）年7月来日、横浜でブラウンにかわってブラウン塾の中心教師となり、横浜居留地ユニオン・チャーチの牧師兼日曜学校長を務めた。77年一致神学校の創立に当たり、ブラウン塾生徒とともに上京して同校教授となり、組織神学と教会史を担当した。インブリー、マクラレンとともに専任講師となり、学校の管理ならびに教育上の強い権限を与えられ、3者のなかで最年長者であったため、同校創立当初の事実上の校長であった。79年同校予科の必要を本国伝道局に強く訴え、横浜に先志学校を開設させることとなる。⁶⁾

アメリカ長老教会宣教師インブリー Imbrie William 1845.1.1-1928.8.4は、ニュージャージー州

の出身で、1865年プリンストン大学を卒業後、約2年間土木技師として鉄道会社に勤務したのち、プリンストン神学校に入学した。70年に卒業し、ニュージャージー州の教会を牧した後、75年9月、来日した。東京一致神学校の創設にあたっては、長老教会の先輩をさしおいて専任教師 Permanent Instructor に任命され、教授として新約釈義・キリスト伝を講じ、明治学院となってからも教授・理事をつとめた。⁷⁾

アメリカ・オランダ改革派教会宣教師フルベッキは、74年に大学南校を辞して太政官顧問として仕えた。彼は当時の政府当局者よりその識見を高く買われ、感化力が大きかった。しかし、自らの使命が宣教事業にあるとの信念を捨てなかった彼は、当時新設された華族女学校教授就任の要請を固辞して、78年7月任期満了とともに官職を辞し、東京一致神学校（明治学院神学部の前身）で教鞭をとった。

井深梶之助は東京一致神学校で学んだ一人である。会津藩士の長男として生まれ、藩校日新館に学んだ彼は、戊辰戦争で父に従い越後に出陣したが、年少のゆえに白虎隊に加われなかった。会津敗戦の挙藩処刑のもと、藩命により東京遊学し、苦学したあと横浜でブラウン塾に学び、東京一致神学校を経て、78年教師試補、79年正教師、翌年麴町教会牧師、同年一致神学校の助教授となり宣教師の著作の翻訳を多数手がけた。⁸⁾

つぎに聖公会系の活動にふれたい。まず、アメリカ聖公会、次にイギリスの2団体に言及する。

アメリカ憲法制定の過程で、その影響を受けながら、アングリカンの伝統を継承しつつも、外国の権威から自由な教会として、アメリカ聖公会 Protestant Episcopal Church in the United States of America は、地方分権・信仰参加・自力財政を基盤とする民主的な教会となり、一国一教会の端緒を開いた。生粋のアメリカの教会でありながら、典型的または平均的アメリカの教会ではなく、内部には対立を抱えながらも祈禱書に基づく統一を維持し、荘厳な礼拝を重んじ、民主的教会体制をもつようになった。他派に比して、伝道活動が遅れをとっていたが、1820年の総会で内外伝道協会

Domestic and Foreign Missionary Society of the Protestant Episcopal Church in the USA が組織され、35年には、「全教会員がそのメンバーである」と規定し、1919年教務院 National Council が組織されるまでアメリカ聖公会唯一の公的組織として内外の宣教活動を推進した。

植民地時代には主教をもたず、一国の教会として成立するために主教職を得るのに苦勞したにがい体験と、19世紀後半の諸教会の伝道熱にも影響され、伝道活動の先兵として伝道地の第一線に挺身する伝道地主教の理念を国内外に具体化したことは、世界中の聖公会の伝道事業に大きな影響を与えた。東洋への最初の伝道地主教はブーン、W. J. であった。

清国と日本を伝道するための主教に、米国聖公会はウィリアムズ The Right Chaninning Moore Williams を任命派遣した。正確に言えば、65年「シナ及び江戸監督」という伝道主教 Missionary Bishop に彼は推された。69年、主教座が中国の武昌から大阪に、その後73年12月に東京へ移され、さらに74年ウィリアムズが日本専任主教となった後もなお、そのままの呼称がしばらく用いられた。

大阪英和学舎は、彼が東京に移ってからは衰微を免れなかったが、78年11月着任のティング Tyng, Theodosius Stevens 1849.11.26-1927.10.19によって再興された。オハイオ州コロンバスに生まれ、ケニヨン大学、コロンビア大学で学んだ後、ケンブリッジ神学校に入学した彼は、卒業後、約5年間伝道に励んだ後、来日した。ウィリアムズから再興を一任された彼は、非常な困難にも関わらず、忍耐と誠意をもって学生を指導し、学校を再建した。その感化により優れた聖職者、実業人、教育者が輩出した。⁹⁾クインビー Quinby, J. Hamilton も普通学科および聖書を教え、生徒数は増加した。

立教学院の濫觴となった聖保羅（パウロ）学校が、ウィリアムズによって、東京築地居留地内に開設をみたのは、1874（明治7）年2月のことである。主として英語と聖書を教える私塾であった。校長はブランシェー Blanchet, Clement T. が任命され、生徒数は当初わずかに数名で、単に Boys

School と呼ばれていたが、まもなく30名以上に増え、St. Paul's School, 日本名を立教学校と称した。草創期から幾多の困難や災害に遭い、転々、ようやく築地居留地に校舎を建てたが、76年に築地の大火で全焼して、一時休校のやむなきに至った。その後、立教学校は復興し(初め生徒16名)、78年11月1日、ウィリアムズが校長に就任して、午後2時間英語を教えた。

彼は開教当初より、日本伝道は、日本人聖職者によるべきであるとし、当時の唯物論無宗教論や科学万能主義の東京大学その他の風潮に対して青年層をキリスト教的影響下に与えらるる必要性を力説し、77年6月には立教女学校、東京三一神学校を設けた。¹⁰⁾ 後者は、彼が77年東京京橋入舟町に家塾のかたちで神学教育を始め、それを母体に翌年10月からイギリス海外福音伝道会との共同神学校として設立したものである。彼が校長として新約学を担当したほか、ブランシェー、C. T. が教会史、クーパー、W. B. が組織神学、クインビー、J. H. が旧約学および倫理神学を教え、ショウ、A. C. が証拠論、ライト、W. B. が祈禱書を担当した。¹¹⁾

イギリス海外福音伝道会 (SPG) からは、最初の日本宣教師たるライト Wright, William Ball 1843.10.5-1912が、ショウ Shaw, Alexander Croft 1846.2.5-1902.3.12 と共にアメリカを経て、1873年9月25日、横浜に渡来した。ライトは日本語を学ぶとともに、霊南坂の陽泉寺まで英米人会衆のために英語礼拝を始めた。74年12月、日本語教師島田弟丸に授洗し、翌年、四谷に講義所を開設、乙亥学校という英語学校を併設して島田を校長とした。78年に牛込昇天教会を設立したほか、東京では四谷、赤坂、青山、小日向などに次々と講義所を、またそれと並行して英語学校を開設した。ショウは、74年から福沢諭吉に請われて慶応義塾構内に住み、同校学生を指導したこともあるが、1879年、東京芝の栄町に聖アンデレ聖堂を建設した際に神学校を併設している。¹²⁾

イギリス教会宣教会 (CMS) からは、モンドレル Maundrell, Herbert 1840-96.11.3が長崎に渡来し、神学校の設立を図った。10年間マダガス

カルで伝道した後、伝道本部から日本宣教師に任ぜられて、75年7月、来日した。長崎およびその近傍で伝道し、翌年、堅信礼を受けた8名の信徒から3名を選んで聖書教育を始めた。77年、CMS本部から神学校開校の許可を得、本部から送ってきた資金によって同年11月30日、出島神学校を開校した。¹³⁾

つぎに、青山学院と明治学院の母胎となった米国最大の教派たる米国メソジスト監督教会の運動をとりあげてみよう。

18世紀にイギリスに起こったメソジスト運動は、北米大陸に有力な教団を形成した。その中核であるアメリカ・メソジスト監督教会は、1847年に中国伝道を開始し、マクレー、R. S. が福州で教育と伝道に従事していた。日本開国が近いことを知った彼は、53年、本国教会伝道局に日本伝道を進言し、71年休暇で帰米したときも機関誌を通して日本伝道を提言した。翌年11月、伝道局は、彼を日本伝道総理とし、ソーパー、J., ハリス、M. C., デヴィソン、J. C. を宣教師に任命、のちに中国宣教師コーレル、I. H. を日本伝道にあたらせることとなった。彼らは73年6月から8月にかけて横浜に上陸した。

1878 (明治11) 年、宣教師と邦人信徒の協力により、東京に耕教学舎が設立された。築地一丁目に開学した小規模なこの男子英学舎は、青山学院の源流の一つである。開業願は西山礼輔名義で提出されているが、実際は、ソーパー、J. に代表されるアメリカ・メソジスト監督教会宣教部と、津田仙・生嶋閑ら日本人メソジスト信徒との協力によって設立された。ソーパーは、アメリカ・メソジスト監督教会本部への報告書の中で、学舎の開校日を5月1日、生徒数約15と報告している。開学当初の教科目は英語正変則・漢学の2科目であったが、2年後、校長菊池卓平の名で私立変則中学校として再届出が出ている。¹⁴⁾ デーヴィスから受洗した元良勇次郎は、津田に頼まれて、一時、ここで教鞭をとっている。

アメリカ・メソジスト監督教会日本宣教部の協力により、日本伝道総理マクレーが中心となって79年10月1日、横浜山手町に美会 (美以美) 神

学校が開校された。大村藩の藩校学頭や長崎御用掛などを歴任した熊野与は、開校式で「この学校はキリスト教の盛んなアメリカ教会の設立した学校で、博識、老練、英才、敏知の教師がおり、盛んになることはまちがいない」と祝辞を述べた。ヴェール校長をはじめアメリカ人宣教師・日本人教師数名の教授陣で、修業年限3年の神学科と、英学を主とする普通科とがあり、漢学以外の講義はすべて英語で行われた。短期間に多くの有為な伝道者を輩出した。¹⁵⁾

なお、日曜学校がこの時期に始められた。

ソーパー、J が東京築地明石町の自宅で73年11月に、ベリー、J. C. やグリーン、D. C. 夫人らが神戸元町で12月に、「安息日学校」の名称で開いたのが最初である。この翌年、太政官は日曜休日制を決定、76年から完全実施されて、Sunday School は漸次盛んになった。『よろこばしきおとづれ』（1876年）など、日曜学校向けの小誌も発刊されたほどである。¹⁶⁾

1873年1月1日から政府はグレゴリオ暦を採用したが、これは財政難に陥った政府が、それまでの1・6日制による年72回の休日から、日曜日52回の休日とすることと、閏年13ヵ月制による俸給支払を節約しようとしたものといわれる（『大隈公昔日談』）。しかし、これより先、68年に横浜運上所、72年に兵学・軍医の2学寮が、御雇教師の便を図るため日曜休日制を採っている。74年3月文部省布達により官立学校の日曜休日が定められた。さらに76年3月12日の太政官布告第27号により、日曜の休日と土曜正午からの休暇が定められた。休日がオランダ語の Zondag の転訛により「ドンタク」、土曜が「半ドン」と呼ばれるようになった。これに対して、保守派からは耶蘇教の制度を踏襲するものとの反発もあったが、『大祭日日曜休暇の由来』（1889年）のように、欧米との交際上必要である旨を述べ、創世記によって日曜休暇を解説した書も現れた。

明治初期においてはカトリックの教育活動は弱く小さかった。小規模な天主堂学校や小神学校（中学程度）のほか、孤児院事業などに力が注がれたが、プロテスタントに比すれば、見るべきものが

少なかった。ただ、プロテスタントが英語教育を提供したのに対して、カトリックは、フランス語教育に特色を発揮したといえる。

明治初期の禁教下に香港やベナンで神学教育を開始したカトリック教会は、日本においても71年以来横浜天主堂で、寄宿制の外国語塾の体裁をとってラテン語やフランス語のほか、漢学などを教授し、神学の予備教育を行っていた。このラテン学校では、73年12月、ベナン神学校から帰国した学生たちの剃髪式が行われ、翌年1月、神田猿楽町の武家屋敷を入手して移転、アルンプリュステーがバリ大神学校長に任ぜられた後、ヴィグルースが校長に就任した。79年には築地教会内に移転し、リギョールが校長となった。当時はラテン語から哲学課程までを教えるにすぎず、神学教育は依然ベナン神学校などに依存していた。

パリー外国宣教会宣教師ヴィリオン Villion, Amatus 1843.9.2-1932.4.1が、京都にフランス語塾を開いていることは注目される。フランスのリヨンに生まれ、1868年長崎に渡来した彼は、浦上（四番）崩れの最中に、大浦天主堂の窓越しに、長崎港から各藩に配流される3000名以上の浦上信徒を見送った経験をもつ。71年、神戸教会に赴任し、外国人居留者や浦上からの配流信徒を司牧、孤児の世話やコレラ患者の看護をした。79年から京都で教会創立の準備をするかたわら、知恩院に通って仏教を勉強した。文部省からフランス語教授の名目で京都定住の許可を得た彼は、同年9月29日、高倉通り二条西入ルの野村家借家に聖ミカエルに捧げた仮聖堂を設置、ここで語学教授のかたわら、ひそかに教理も教えた。塾生の中には、渋谷栄一、稲畑勝太郎、林市蔵などがいた。上京の際には、和仏学校で西園寺公望、原敬、松岡康毅などに教えた。¹⁷⁾

また、同会のマラン Marin, Jean-Marie 1842-1921.5.21は、1873年、函館教会主任司祭となり、77年に聖堂を建立した翌年、シャルトル聖パウロ会を招いて孤児院を創設した。彼はフランスのジブレ生まれで、66年来日し、翌年ジラルの後任として横浜聖心聖堂（山手教会）主任司祭となり、68年には東京築地に外国語教授の塾を設立してい

た。¹⁸⁾

ロシア正教会の教育活動は微弱である。

ロシア語を青年に教えていたニコライは、やがて専ら正教を修学して教役者となる者のために、74年7月伝教学校を開設、ロシア語を学習する者は一ツ橋の外国語学校に送った。さらに76年、この学校の一部を改組して正教神学校とした。ロシアのスモレンスク神学校を卒業後キエフの大修道院に入り、75年ニコライの補佐として修道司祭モイセイと共に来日したエウフィミイ Yefimii が、語学校と正教学校で教授している。

第2節 官公立学校における外国人信徒の教育活動

この時期の特徴の1つは、宣教とキリスト者の集団形成が官公立学校において行われ、しかも、平信徒による感化が精彩を放ったことである。

北海道開拓事業における人材養成を目的とした中等農業機関として、1872年、開拓使仮学校が東京芝増上寺内に設置された。76(明治9)年6月29日、日本政府の招きによりアメリカ人学者クラーク Clark, William Smith 1826.7.31-86.3.9が来日する。これは、ノースロップ Northrop, Birdsey Grant 1817.7.18-98.4.27の推挙によるものであった。イエール大学を卒業後、マサチューセッツ州サクソンヴィルの会衆派教会牧師、同州教育局秘書官、コネチカット州教育秘書官を歴任した人物である。ノースロップは、森有礼の依頼により、津田梅子らの少女留学生受け入れ体制を準備したほか、帰国まで行き届いた世話をし、絶えず黒田に報告を送った。

来日後まもなく、札幌学校が開校する。クラークは、同校の教頭として学生を募集し、黒田清隆開拓使長官と札幌に同行、同年8月14日に開校式を挙げた。その直後、同年9月8日、同校は札幌農学校と改称し、規模を拡大する。北海道拓殖のための有用な人材を養成する目的で、開拓使が開校した日本最初の高等農業教育機関である。

クラークは、医師アサートンの長男としてマサチューセッツ州アッシュフィールドに生まれた。この州はアメリカでも早く教育が開けた州であ

る。彼は、少年の頃から非常に勝ち気な性格の人物であったと言われ、さまざまな競技においても常に必勝を期して努力するふうがあった。1844年にアマースト大学に入学、同校を卒業後、48年、母校ウィリントン・セミナリーで化学および自然科学を教えた。50年、ドイツのゲッチンゲン大学に留学し、塩化マグネシウム、アンモニア、隕鉄の研究に打ち込み、52年に「隕鉄の化学的成分」で博士号を取得した。帰国して母校アマースト大学で化学の教授となったが、61年8月、南北戦争に志願士官として参加し、北軍の基幹部隊といわれるなかで戦い、大佐に昇進して軍職を63年4月に辞した。退役後、67年にマサチューセッツ農科大学が設立された際、学長に就任、在職中1年の休暇を得ての来日であった。¹⁹⁾

この頃招聘された外人教師を大きく分けると、学問的に西欧の知識を伝えるという学術的能力を評価されて来日した人、新しい学校を建設していくために教育者的な行動を期待された人、新政府の政策に対してさまざまな勸告助言を依頼する人などがあるが、クラークは特に前2者に重点において招聘された人物といえよう。彼は校規を定め、農場を設けてアメリカ式の教育を施した。黒田の要請に対しても、人が2年かかることは自分は1年でやってみせるといような言をはき、徳育方針をめぐって黒田長官の主張に頑として引かない不撓不屈の人であったと伝えられている。1年間の契約であり、77年4月まで在任した。

札幌農学校と駒場農学校は、わが国の農業面での高等教育の草分けの学校になるが、両者とも入学生はほとんど貧乏士族の子弟であった。学費は官費によって賄われ、卒業後5年間は開拓使に奉職する義務があった。中央政府の指導者的地位がほとんど約束される駒場に対して、「蝦夷」といわれた北海道開拓に身を捧げる札幌農学校では、志願する者の心意気は異なっていた。クラーク以下3人の面接試験を受け、佐藤昌介(のち北海道大学初代総長)、大島正健(のち札幌農学校教授、中国古韻の研究)ら、血気さかんな学生たちが第1期生としてクラークの教えを受けることになった。²⁰⁾

学校年季は、8月第4木曜日に始まり、翌年7月最初の水曜日に終わるものであった。札幌農学校の生徒定員は100名、修業年限は4年であり、普通学と専門学の2科に分けられていた。普通学は、基礎的教程を教授し、専門学は、各学問分野に応じて区分された4科のうち1科を学生に選択させ教授するという形式をとった。札幌農学校の教育課程編成のモデルになったのは、アメリカの州立農学校であり、英語で講義された。

教科目に演説法と練兵の2科目がおかれているのが異色である。演説法は、クラークが力を入れたものの1つである。指導者には雄弁が必要との考え方から、日本語・英語ともに課した。学生の士気を養うために週2回課された練兵は、同校独自の科目であり、屯田兵制から発想されて組み入れられたものである。²¹⁾

札幌農学校に着任したとき、クラークは51才であった。愛弟子であった自然科学専門のダビッド・ビー・ベンハロー教授と、数学専門のウィリアム・ホイラー教授の二人を伴い、独自の教育方針をもって学生に深い影響を与えた。学生に聖書を教えることで黒田と論争し、また従来の諸規定を廃して Be gentleman の1条でよしとした。冬山で学生を背に乗せて植物を採取させるなど多くのエピソードを残している。野外講義も重んじられ、大自然こそ最良の教師であるとみなされた。会衆派に属する信徒である彼は、授業の前に聖書を読み、祈ったという。

札幌農学校における教育の特殊性は、教育課程におけるフォーマルな教育のほかに、こうしたインフォーマルな教育のウエイトが無視しえぬほど大きかった。クラークに象徴されるプロテスタントの持つ高い教育理念と、明治初期の北海道という未開地の持つ「むきだしの自然」の結合がユニークな校風を生み出した。たとえば、明治期の生んだキリスト教者として特筆すべき内村鑑三、新渡戸稲造はいずれも札幌農学校の2期生である。かれらは、札幌農学校における教育課程のなかから、その宗教者としての芽を見出したものではない。フォーマルなカリキュラム以外の理念や「自然」にはぐくまれた教養価値・情操価値に

よって陶冶されたのである。²²⁾この学校は、クラークという人格の感化力によって、ピューリタニズムの精神・気風に満たされた「自立」を伝統とするようになっていった。

クラークは、その任を終えるにあたり、「イエスを信ずる者の契約」を作成し、1877年3月5日、第1期生15名全員に署名させた。キリストへの信仰を告白し、十字架の死による贖罪の主の愛に対する感謝としての生涯を送ること、早い時期に福音主義教会で洗礼を受け入会することをうたっている。三位一体の信仰とあわせ、モーセの十戒を守ることを約束させたもので、福音主義信仰とともにキリスト信徒の倫理の強調がうかがわれる。他方、宣教師や教会との接触の乏しい環境を考慮して、少なくとも週1回は相互に信仰的会合をもち、聖書の会読や祈禱をすることが定められている。

署名した者には、伊藤一隆、大島正健、佐藤昌介（最年長者）、渡瀬寅次郎ら1期生のほか、太田（新渡戸）稲造、宮部金吾、広井勇、内村鑑三ら2期生もいた。渡瀬は77年4月、クラークを鳥松駅に見送っている。その後まもなく、一期生15名は、アメリカ・メソジスト監督教会の函館教会牧師ハリスから受洗する。

たとえば、のちに言語学者となり教育家としても活躍した大島正健は、東京英語学校を経て札幌農学校に入学し、78年ハリスから受洗している。有名な内村鑑三1861.3.32-1930.3.28は、高崎藩士内村宣之の長男として江戸で生まれ、東京英語学校から77年に入学、翌年6月2日、やはりハリスから受洗している。こうして、札幌農学校に入学した1、2期生によって、キリスト者集団「札幌バンド」が形成された。初期の卒業生たちからは、農学以外で身を立てた多彩な人材が育っていった。

中央の東京では、幾人かの御雇教師が活躍していた。

日本伝道の端緒を開いたアメリカ監督教会（アメリカ聖公会）のサイル Syle, Edward W. 1817-1890.10.4は、74年から79年にかけて東京開成学校とその後身である東京大学において、修身学

および歴史学の教師を務めている。70年頃来日して横浜のイギリス領事館付仮牧師、横浜クライスト・チャーチ牧師となった彼は、72年、横浜で設立された日本アジア協会の生みの親のひとりとして、その会長に就任、79年日本を去るにあたっては名誉会員に推されてもいる。²³⁾

アメリカ・オランダ改革派教会宣教師のなかでは、ワイコフが76年から東京大学予備門の教師となっているが、翌年帰国した。

スコットランドのペイズリーに生まれ、グラスゴー大学を卒業したディクソン Dixon, William Gray 1854.5.21-1928.9.4が工部大学校の御雇教師として、1876年8月20日から79年12月31日まで英語と英文学を教えたほか、同校の書記も務めている。彼は学生の間で英語討論会を組織し、また、定期的な集会のほか、浅草井生村樓で教育に関する講演会を開き、体育・知育・徳育・宗教教育などの啓蒙活動を行った。小崎弘道、原胤昭、津田仙、岡田松生らとも交際があり、78年1月、銀座大和屋で外国人YMCAである東京クリスチャン・アソシエーション²⁴⁾を組織して会長となるなど、日本の信徒運動に影響を与えた。また、日本アジア協会の書記も務めた。

南フランスのブーシュデュローヌ県ランベスク出身のデュリー Dury, Leon 1822.5.12-91.10.24が75年から77年まで、東京開成学校、東京外国語学校の教師となっている。マルセイユで医学を修め、1862年函館に設立される病院に招聘されて来日した彼は、計画中止のため翌年長崎駐在フランス領事に任命された。70年に領事を辞職し、広運館のフランス語教師となったが、当時の教え子には井上毅、西園寺公望らがいる。篤信のカトリックで、プティジャンと親交があり、大浦天主堂の建設に協力し、迫害を加える当局に抗議して宣教師の伝道を助けた。京都府の仏学校教師に転じて、フランス語のみならず京都の殖産興業のために寄与した後の上京であった。

静岡学問所教授時代の中村正直の弟子で、横浜に出てピアノに英学を学んだ杉山孫六は、72年4月バラから受洗し、同年9月、静岡学問所で働くよう呼び戻された後、74年にコ克蘭と交渉して、

カナダ・メソジスト教会宣教師マクドナルドを賤機舎の御雇教師として招くことに成功している。マクドナルドは、静岡で優秀な旧幕臣や沼津の江原素六らと接触することとなる。

静岡県の沼津には、ミーチャム Meacham, George Marsden 1833-1919.2.2.0が、1876年9月20日、集成舎に御雇教師として赴任している。カナダのベルヴィルに生まれた彼は、56年に在カナダ・ウェスレアン・メソジスト教会の信徒伝道者となり、翌年教職試験に挙げられ、ヴィクトリア大学を卒業して、60年、接手札を受け年会員となった。カナダ・メソジスト教会（合同後の名称）の第2陣宣教師として、イービ, C. S. と共に76年9月8日に来日し、佐藤重道を通訳にして伝道を始め、翌年、校長の江原素六に授洗、続いて教官と生徒6名に授洗し、沼津メソジスト教会の基礎を築いた。

熊本ではすでに熊本洋学校が設立されていた。藩庁は、1871年9月1日に開設したこの西洋式の厳格な教育機関において、アメリカの退役陸軍大尉ジェーンズを招き教育にあたらせていた。この人選は、1865年から83年までアメリカ・オランダ改革派教会外国伝道局総主事の任に当たったフェリス Ferris, John Mason 1825.1.17-1911.1.30による斡旋であった。

同校は4年制で、彼ひとりで全学科を教え、英語の原書を用いた。開発主義的自学自修、班別学習、演説など特異の学習形態をとった。当初、彼はキリスト教の伝道をあえてしなかったが、73年から有志学生を対象に課外授業として聖書研究会を自宅で始め、75年初め頃から日曜礼拝を行った。就任後3年を経て、生徒が彼の語る英語を解するにいたって後ようやく、天文・物理等の教授に際して有神論を刻みつけ、さらに歴史・英文学の時間において欧米文化の基礎であるキリスト教研究の必要を述べ、しだいに生徒の信仰の目を開かせた。

知育偏重を避け徳育を重んじたジェーンズの薫陶を受けた生徒たちの間で、とくに75年11月以降、祈禱会の熱が一段と高まった。やがて彼の聖書講義に導かれた学生たち35名が信教を誓いあい、奉

教趣意書に署名する。1876（明治9）年1月30日（日曜日）の花岡山奉教の結盟である。花岡山は、熊本市南西にある海拔133mの小山である。「此ノ教ヲ皇国ニ布キ大ニ人民ヲ蒙昧ヲ開シ」との宣言文に結集した在學生を中心に、いわゆる「熊本バンド」が誕生した。

1回生には伊勢時雄、浮田和民、2回生には宮川経輝、金森通倫、海老名喜三郎、3回生以降には徳富猪一郎、岡田松生らがいる。1回生の生徒取締をつとめた小崎弘道は奉教の誓いには加わらなかったが、ジェーンズの指導と友人の熱心な姿にうたれ、ジェーンズから受洗した。

このときにキリスト教に帰依した生徒のなかには、歴史に名を残すものがいた。のちに政治学者となる浮田和民1860.1.19-1946.10.28は、肥後藩の栗田十太直之の3男として熊本に生まれ（幼名は亀雄）、70年旧氏浮田に復帰、和民を名乗り、1871年9月、熊本洋学校に入学した。のちに、早稲田大学教授となり、雑誌『太陽』主幹をつとめ、自由主義・立憲主義の論陣にたつて大正デモクラシー運動を鼓舞した人物である。

筑後柳川藩士の子に生まれた海老名弾正1856.9.18-1937.5.22は、のちに同志社総長となり、伝道者としても活躍した。彼の妻となる横井小楠の娘みや1862.11.6-1952.3.4も熊本洋学校に入学している。彼女の母つせ子は矢嶋家の出で、竹崎順子、矢嶋楯子、徳富久らとは姉妹である。みやは、69年の父の暗殺後、熊本に転居し、ジェーンズの妻から英語を学び、75年に徳富初子と共に洋学校編入を許可された。熊本初の男女共学の実現である。このとき、生徒の海老名は、女子が男子と一緒に学習することに抗議し、ジェーンズにたしなめられている。

花岡山の宣誓文発表とともに、いたるところで迫害が起こり、76年8月、洋学校は早くも廃止される。閉鎖とともに、ジェーンズは、弟子たちを同志社へ送るべく奔走した。

第3節 日本人信徒による私塾・学校の設定

信仰解禁後まもなく、キリスト教を信奉する日

本人の中から、キリスト教を建学の理念に掲げる学校や、キリスト教の影響色濃い私塾を設立する動きが現れた。具体的には、青森の東奥義塾、東京の同人社と学農社、京都の同志社、長野の上田英学校がそれである。

まず、東奥義塾からみたい。

菊池九郎は吉川泰次郎、兼松成言らと共同結社し、1872（明治5）年11月23日、開学許可を受け、青森県弘前に私塾を設立している。1796年創立の藩校稽古館が、廃藩置県と学制発布により廃校のやむなきに至ったのを憂えた菊池が、みずから学んだ慶応義塾を範にとり、東奥義塾と改称して私学として継承する計画を立てたものである。同志に諮るとともに旧藩主・津軽承昭（つぐあきら）に具申してその賛同を得、土地・建物・交付金を受けて発足させた。

津軽第12代藩主承昭1840.9.7-1916.7.19は熊本藩主細川斉護の第4子として江戸竜口熊本藩邸に生まれ、津軽第11代藩主順承（ゆきつぐ）の婿養子となり、承烈（つぐてる）と称した。57年に藩主となり、65年、承昭と改名した。尊皇派に属し、68年に奥羽越列藩同盟を脱退、庄内藩征討軍と69年の函館戦争にそれぞれ派兵した。開明的な藩主であり、59年に藩学稽古館に蘭学を、66年には英学を導入したほか、藩子弟で優秀な者を江戸、横浜、静岡、函館、鹿児島へ留学させ、弘前藩学漢学・英学寮の維持に努めた。1872年の「学制」制定後、「東奥義塾」創設というかたちで藩学を維持存続させた。77年の「西南の役」に際しては旧藩士に征討参加を呼びかけた。

この私塾は、当初から外国人教師を招く方針であった。73年2月6日、アメリカ・オランダ改革派教会のヴォルフ、C. H. H. が、74年には、その後任マクレー、A. C. が着任し、いずれも学生に良い感化を与え、教室では聖書を教えた。74年12月に着任したイング、J. 夫妻は、78年3月まで学生を教えるかたわら、本多庸一と協力して伝道につとめ、弘前公会の設立に貢献した。やがて弘前公会は美以美（メソジスト）派に加入し、同派から宣教師が派遣されて同校との協力関係を深めていったが、東奥義塾はミッション・スクールとな

ることはなかった。

儒教的伝統・教養とキリスト教的西洋思想を融合させるこの学校に対して、旧藩主は設立以来83年までの12年間、毎年多額の補助を続けた。宣教師の報告には「大名学校」(Daimio school)、「東奥カレッジ」などと記されている。当時、東奥義塾は、東北地方においては、すべての面で進歩的・啓蒙的・先駆的活動の中心であった²⁵⁾。1876年夏、明治天皇の青森巡幸に際して、菊池九郎・本多庸一・イングに引率されて、工藤儀助・佐藤愛磨・珍田捨巳・伊藤重ら10名の塾生が謁見し、英語演説をしたうえ英文綴書を奉呈している。このうち佐藤は、77年イングの紹介でアメリカのアスベリー大学に留学した。

牧師の長男としてイリノイ州の農村で生まれたイング Ing, John. は、1859年、アズベリー大学に入学し、南北戦争に父と共に従軍、大尉となっている。戦争後、学業に戻って牧師への道を志し、70年セントルイス年会員となり、レキシントン教会に任命された。同年結婚し、宣教師として清国の九江に赴き、約4年間伝道したが、妻の健康がすぐれず、74年(明治7)年夏、帰国を決意した。その途次、横浜に立ち寄ったところで東奥義塾から英語教師として招聘され、12月はじめに弘前に着任したのであった。

イング一行を伴って帰郷した本多庸一は、東奥義塾の塾頭(78年以降は塾長)となった。本多と協力して伝道した結果、75年6月、東奥義塾教員・学生14名がイングから受洗、10月3日、8名の受洗者を加えて弘前公会が設立された。横浜、東京につぐ第3の公会であり、東北地方最初のプロテスタント教会であった。イングは、76年12月にメソジスト派の教会に加入し、正式に牧師となった。3年余の在任中に東奥義塾の学生や教師に大きな感化を及ぼし、校主の菊池をはじめ学生など35名に洗礼を授け、弘前教会の基礎を築いた。これら初期の信徒たちは「弘前バンド」と呼ばれることもある。妻 Lucy Elizabeth も男女各一クラスを教えた。トマト、アスパラガス、レタス、グズベリなど各種の野菜果樹の種子苗木を移入し、また西洋りんごを紹介した。妻の健康が悪化したため、

78年3月に帰国した。²⁶⁾この年、デヴィソン Davisson, W. C. が塾の英語教師となっている。

東京では、73年、中村正直が同人社を創設している。中村は明治政府の招きに応じ、72年に大蔵省に出仕、そのかたわら東京小石川区江戸川の自邸内に英学・漢学の私塾を設立した。74年12月のクリスマスに、宣教師コ克蘭, G. によって洗礼を授けられて入信している。その彼が翌年出版した訓点本『天道遡原』は、当時のベストセラーとなり、広くキリスト教的感化を及ぼした。

カナダ・メソジスト教会最初の来日宣教師となったコ克蘭 Cochran, George 1834.1.14-1901.5.24 は、アイルランド生まれで、1873年、マクドナルドと共に来日し、横浜で伝道していたが、翌年ユニオン・チャーチで中村を知り、招かれて同人社の教師となった。同人社は明治初期の3大私塾の一つで、73年2月に設立され、5月東京府に私学開業願を提出している。文部省の規定では、私立外国語学校の部に属する。当時、福沢の慶応義塾、近藤真琴の攻玉社とともに3大私塾とされた。外国人教師により英語教授が行われ、東京開成学校に進学する予備校の役割をはたしていた。コ克蘭は、構内に居住して英語を教授し、また自宅で聖書の輪読を行って伝道した。

76年1月、東京に学農社を開いた津田仙1837.8.6-1909.4.24は、下総国佐倉藩主堀田正睦に仕える小島善衛門良親の4男として城下天神曲輪に生まれた。18歳のときに江戸に上ってオランダ語を学び、さらに進んで英語の習得に努めた。61年に津田初子と結婚して津田姓を名乗った。71年、時の北海道開拓次官黒田清隆の海外女子留学生募集に際して、当時わずかに8歳の次女梅子を応募させたことは有名である。73年、ウィーンで開催された万国博覧会に出席する日本政府派遣団に加えられて渡欧し、展覧会場で聖書を見たほか、ウィーンの優れた文物制度に深い感動を受けた。帰国後、アメリカ・メソジスト監督教会宣教師ソーバーの人格に触れ、74年1月3日、彼から受洗した。禁酒運動家としても知られた。

麻布本村町の自宅内に、海外農業の日本導入とキリスト教精神による教育の徹底を目的とする学

農社を設立した津田は、「泰西農学」の講究と実習を組織的に行い、同時に『農業雑誌』を創刊して、従来の日本農業に新機軸を開いた。キリスト教を指導原理とし、フルベッキやソーパーらを招いて礼拝・講話を行った。講師陣には中島力造、小崎弘道らが加わった。兵庫三田出身で同志社英学校第1期生の元良勇次郎は、津田の要請に応え、79年中退して上京、教鞭をとった。熊本バンドの一人でジェーンズから受洗した岡田松生1858.7.6-1939.2.13も同志社を卒業後、上京して学農社の教員となった。また巖本善治はここに学び、卒業後しばらくは学農社の事業を助けた。この学校は、創立以来きわめて順調に発展し、明治14年には、教員10人、生徒175人を擁するに至った。実績が上がり、周囲からも高評を得たが、農業に関する状況の変化により、設立後10年で廃校となる。²⁷⁾

次に長野県の上田英学校にふれたい。

上田藩士・稲垣信は英語学習のため1872年横浜に至りバラに接して信仰を得、受洗せぬまま郷里に戻り、自宅を開放して聖書研究会・祈禱会を開いた。出席者有志は、禁酒会を組織し、伝道に励んだ。76年に稲垣は横浜に赴きバラから受洗し、同年、ミラーやバラを上田に招いて、受洗者が増えるにともない公会を設立した。76年10月に設立された上田基督公会に、77年6月真木重遠が伝道師として着任すると、直ちに英学校を開設し、伝道の一助とした。この上田英学校の授業は毎日午後3時半から6時半までの3時間、パーレー (Parley, Peter) の『万国史』などをテキストとして用いた。最初の入学者は12名であった。²⁸⁾

カトリックでは、浅草玫瑰学校がある。本多善右衛門が、東京浅草猿屋町の日本家屋を購入して、1877年4月15日に開校した学校である。教会の設置を意図した彼は、まず学校を設立して一室に小聖堂を設け、宣教師ラングレをフランス語教師として雇うかたちで招聘した。開校式に40名の青年男女が受洗し、のちに向柳原町に移転して聖パウロ聖堂を建設、浅草教会の母体となった。79年9月、築地教会から男子孤児院が移管されて再び猿屋町に移って約50名を収容、玫瑰学校または玫瑰塾と称した。玫瑰は、ロザリオの当字である。

以上の教育機関は、長い歴史的眺望からみれば、泡沫的存在として消え去るか、もしくは影響力のほとんどない存在に衰退していく運命にあった。今日への影響と現在に至る発展を考える場合、これらに比して、新島襄の創設した同志社が最も重要である。

彼は上州安中藩の武士（祐筆）民治・とみの子として、1843（天保14）年2月12日、江戸神田の安中藩主の屋敷で生まれ、七五三（しめた）と命名された。57年に元服して祐筆補助役となり、59（安政6）年から蘭学研究を始め、翌（万延元）年から築地の軍艦操練所に通学し、数学・航海学を学んだ。63年からは蘭学から英学に切り換え、ブリッジマン、E. C. の『大美聯邦志略』、漢訳聖書を読み、アメリカとキリスト教にひかれた。64（元治元）年7月、脱藩してアメリカ船で函館から海外に脱出、65年7月、ボストンに到着した。

アメリカでは、船主アルフェス・ハーディ夫妻の庇護のもとに、フィリップス・アカデミーに入学することができた。翌66（慶応2）年末、アンドーヴァー神学校附属の教会で受洗した。67年9月、アマースト大学に入学、70（明治3）年7月に卒業して理学士 Bachelor of Science となり、ついで、アンドーヴァー神学校に進み、74年7月特別コースを卒業した。

密出国という手段で苦難のすえに辿りついたアメリカ東部は、全体として最も敬虔なプロテスタントイズムの精神に満ちた地域であり、彼の学んだアマースト大学 Amherst College は、最も伝統的なリベラル・アーツ・カレッジの一つであった。新島が留学していたこの大学は、アメリカ・マサチューセッツ州中部、コネチカット川に近いアマースト町にある。辞書編纂家ウェブスターや女流詩人エミリー・ディキンソンの父など、アマーストの村民によって1821年に創立された。新島は、日本人として最初の正式な海外大学の卒業生であった。以後、神田乃武、内村鑑三、横山愛輔らがここに留学している。

新島の在米中、親代りとなったハーディ Hardy, Alpheus 1815.2.1-87.8.7は、マサチューセッツ州ケープ・コッドに生まれ、フィリップス・ア

カデミーに入学、牧師となることを目指したが、病気で中退、商取引によって得られる利潤を神の召命にかなう事業に投ずることによって、牧師と同じ神に仕えうると考え、店員から身を起こして南米・地中海・インド・中国に13隻の貿易船を就航させる実業家となった。南北戦争中の1861年に、マサチューセッツ州の共和党上院議員に選出された。また、フィリップス・アカデミー、アマースト大学、アンドーヴァー神学校の理事を務めたほか、57年以降アメリカン・ボード財務委員、73年から86年まで財務委員会議長を務めた。²⁹⁾アメリカ在学中、新島襄は Joseph Hardy Neeshima と称した。

維新後、特命全権大使の欧米歴訪に随行した理事官・田中不二麿と邂逅する。当時、代理大使としてアメリカにいた森有礼の紹介によるものであった。これが機縁で、在学中の新島は、72年3月から73年9月まで、田中ら一行をアメリカ・ヨーロッパの教育事情視察に先導する役割を仰せつかり、田中理事官に随行し、欧米の学事を視察するチャンスをつかむ。岩倉遣外使節団の米欧回覧に随行することによる半年にわたる学事視察の結果を、新島は田中に復命書草稿として提出する。この草稿は、田中が帰朝してから復命報告書『理事功程』（和装15本巻として文部省から刊行）をまとめるのに大きく役立った。資料収集にあたった新島が、その重要な部分を執筆したものと考えられている。³⁰⁾

この米欧回覧という名の調査行は、明治5年から6年にかけての時期、つまり「学制」頒布からその直後にかけての時期であった。新島は、当時の日本において欧米の学校・近代教育制度に関する最高の知識・情報と見聞をもつことになっていたのであり、そのような蓄積は、帰国後、新島が白面の青年として学校づくりに乗り出すさいの大きな自信になっていたと見られる。

新島は、1874（明治7）年9月24日、ボストンのマウント・ヴァーノン教会で按手礼を受け、アメリカン・ボードの宣教師補の資格で、宣教師としての任命書を受けた。同年10月、米国ヴァーモント州ラットランドにおけるアメリカン・ボード第

65回年会で、日本にキリスト教主義学校 Christian Institution を設立する計画を訴え、支持とともに5000ドル余の浄財を得た。翌月、彼は、10年4ヵ月ぶりに祖国の土を踏んだ。

会衆派 Congregational Church は、長老派、バプテスト派などと同様にイギリス教会から分かれた反国教の諸派であり、その一部は16世紀の終わりにオランダに逃れた。1620年に新大陸に渡ったピューリタンの多くは会衆派的な信仰を抱いていた。彼らは信条よりも教会政治や典礼の改革についての関心が強く、経済的にも信条的にも各個教会の独立性を重んじ、民主主義的・自由主義的な教会運営に力を入れていた。アメリカにおいては、1810年に外国伝道会社アメリカン・ボードが設立され、会衆派関係の者が多くこれに加わったが、会衆派だけの伝道会社ではなかった。この団体から派遣されて初めて日本に渡来したのがグリーンであることは前稿で記述したが、74年に組合教会の最初の教会である摂津第一基督公会（神戸教会）が創立され、彼が仮牧師となった。つづいて、デーヴィス、アッキンソン、ベリーのほか、タルカット、ダッドリーら婦人宣教師も渡来してきた。

新島が属していたアメリカン・ボード・ミッション（アメリカ伝道会社）は、組合教会派に属していた。すでに安政通商条約締結後から、アメリカの監督教会派、長老教会派、改革教会派が日本に宣教師を派遣していたが、彼らは関東地方に伝道を開始していた。組合教会派は、これより約10年おくれて日本伝道を開始したので、同派はすでに他派の伝道計画にあった関東地方を避けて関西地方への伝道を企図した。かくして関西地方は主としてアメリカン・ボード関係の伝道圏となった。

滞米中にアメリカン・ボードのジャパン・ミッションの宣教師補の資格を得て帰国した新島は、他の先輩宣教師らと共に関西に伝道の地を定めた。さっそく木戸孝允の周旋により大阪に学校設立を図るが、渡辺昇知事の反対によって奏功しなかった。大阪に目標を定めた当初の計画は、府知事がキリスト教を危険視して難色を示したため頓挫した。そこで、滞米中に相識の間柄であった木

戸の斡旋により、木戸と同じ長州の横村正直が権知事をしている京都に開校計画の場所を転じた。³¹⁾

京都府顧問の山本覚馬に出会ったことも、京都に学校を設立する交渉を進めるうえで大いに力となった。

山本覚馬1828.2.25-92.12.28は、会津若松に生まれ、江戸で佐久間象山・勝海舟に学び、会津藩蘭学所教授となった人物である。1864年、藩主松平容保に従い京都に出て会津藩砲兵隊を指揮、また洋学所を設立し諸藩士に教授した。この頃眼病を患い失明、鳥羽伏見の戦いで捕らえられたが、薩摩藩邸に幽閉中「管見」を執筆した。69年から77年にかけて京都府顧問の職にあり、近代的諸施策を推進したが、その間、脊髄損傷のため歩行の自由も失った。72年、アメリカン・ボード宣教師ギュリック、ペリーに会い、また75年4月ゴードンから『天道遡源』を贈られ、「群疑ハ一度此書ヲ読デ全ク氷解」したという。その年たまたま上洛した新島襄と会い、京都の学校設立計画に共鳴、みずからの所有地（旧薩摩藩邸跡）を敷地として寄付した。

75年8月23日、新島は山本と連名で、宣教師デーヴィスを雇用するかたちで「私学開業願」を京都府に提出し、9月初め文部省と京都府の許認可を受けた。帰国から1年後の1875（明治8）年11月29日、新島は、官許同志社英学校を上京区寺町通丸太町上ル松蔭町に仮校舎で開校することに成功した。

創設時の「同志社仮規則」によれば、社長新島、結社人山本の名で「社ヲ結ヒ英学校ヲ開キ之ヲ名ヲ同志社ト称（ス）」とある。宣教師側の呼称は、Kioto School, Kioto Training School, Neesima Schoolであった。翌年9月、相国寺門前・旧薩摩屋敷（京都御所の北）に移転した（現・今出川校地）。

学校設立に協力したデーヴィス Davis, Jerome Dean 1838.1.17-1910.11.4は、ニューヨーク州に生まれ、ペロイト大学在学中に南北戦争が始まり、北軍の義勇兵として参戦、シャイローの戦いに連隊旗手として大功を立て、陸軍中尉に昇進し

た人物である。戦後、学園に復帰し、のち、シカゴ大学に学び、しばらくワイオミング州で開拓伝道に従事した後、志を決してアメリカン・ボード宣教師となり、1871年来日、神戸と摂津三田で伝道した。同志社英学校設立に際して新島の計画に賛同し、開校当初からの教師となった。主な担当科目は組織神学、キリスト教倫理学、キリスト教弁証学であった。彼の司式で、76年1月3日、女紅場の舎監兼教師をしていた山本の妹・八重子と新島は結婚した。京都における最初のプロテスタント結婚式であった。

同志社の教師として人身窮理学などを講義した人に、宣教医テラー Talor, Wallace 1835.6.18-1923.2.9がいる。彼は、オハイオ州生まれでミシガン大学医学部、オペリン神学校を卒業後、74年来日し神戸で医療に従事、翌年岡手で医療と伝道に従事したのち、1876年3月から約3年間、同志社で教鞭をとった。³²⁾

1873年2月、明治政府は切支丹禁制の高札を撤去したが、この措置は、復古主義から開明主義への転換という複雑な国内政情と、外国の圧力のもとで採られた形式的な措置であり、国内ではまだまだキリスト教は危険視されていた。とりわけ京都地方は、外人宣教師たちが辺境とよんでいた土地であった。新島が同志社英学校を創設した年は、まだこの高札撤去から3年もたっていない時期である。したがって、新島の同志社の開学と経営は必ずしも順風の下に行われたものではなかった。一つは資金難であり、もう一つは宗教教育対策であった。

多大な基金を寄付してくれた恩義上、アメリカン・ボードに対しては布教戦略に應えねばならなかった。他方、政府に対しては外国のキリスト教界の傀儡ならざるを弁明し、経営の主体性と独立性を示さなければならなかった。同志社で教える科目を列挙した末尾に記した「聖經」が当局によって認められず、「講説」としたことに対して宣教師側から非難が起こった。その一方では、宣教師デーヴィスを教授陣に加えることに対して当局から難色が示され、新島は、それが財政上の理由からであり、将来純粋な学士を迎える旨、政府に弁

明している。³³⁾

両者のバランスをとることは困難であった。修身学を教授中、生徒の質問に答えるなかでキリスト教の話を加えたとして、教授巡覧していた京都府学務課長から注意を受け、新島は府知事に弁明を余儀なくされたこともあった。校門近くの豆腐屋を買い取り「三〇番教室」として、そこでバイブルを講ずるという苦肉の策に出ざるをえなかった。聖書講義に関しては、いわば綱渡りの体であった。

熊本洋学校の廃校後、熊本バンドの多くの俊才たちが同志社に編入学してきた。

76年8月に同校が廃止されると、熊本洋学校の生徒たちは熊本では受け入れられず、主として京都の同志社に進んだ。浮田和民や小崎弘道・金森通倫・徳富猪一郎らは同年9月、同志社英学校に転じ、神学や哲学などを中心に学んで、79年6月卒業している。横井みやも、洋学校閉鎖後、時雄と共に東京に遊学、翌77年京都に移って同志社に入学、女学校に在籍して男子クラスで授業を受け、同年新島襄から受洗している。彼らによって同志社は活気を呈した。

「官許同志社英学校」は、設立当初は入寮生10名、通学生18名が集まるだけの寺子屋ほどの小さな学校であった。明治9年のはじめには、熊本洋学校の生徒たち30名ほどが大挙入学してきたこともあり、校舎が新築され寮もつくられ、入寮生47名、通学生を合わせて70名ほどになった。

78年1月、アメリカン・ボード系は運動体として日本基督伝道会社を形成した。翌年からゴードン Gordon, Marquis Lafayette 1843.7.18-1900.11.4が同志社で教鞭をとることとなった。彼は、南北戦争後、アンドーヴァー神学校を経て、ニューヨークの医学校を卒業、当初カンバーランド長老キリスト教会に属していたが、72年に妻アグネスとともに来日した。ペンシルバニア州生まれのアメリカン・ボード宣教医である。大阪居留地に住んで日本語を覚え、日本文化に親しむべく努力する一方で、日本人に英語を教え、また、この頃、医療を多少行ったが、視力障害のためやめた。山本覚馬がキリスト教徒になる最初の契機を与えた

人物といわれる。その後いったん帰国していたが、新島に招かれて再来日し、同志社神学校を中心に、説教、牧会学、賛美歌などを教え、社会学的研究を奨励した。

ジェーンズから受洗した熊本バンドの一人・市原盛宏は、79年同志社英学校予科を卒業後、直ちに幹事となり学校の経営にあたり、新島の信任を得た。彼は在学中より西京第1、第2公会の仮牧師に就任していた。

安部磯雄のほか、深井英五、徳富猪一郎（蘇峰）、元良勇次郎、大西祝、小崎弘道、海老名弾正、柏木義円、浮田和民といった明治の言論・思想・学術・宗教を彩る若き群像が、新島の魅力ある人格に引き寄せられて同志社に集まっていた。ここに新島の本領があった。

初期の同志社の模様を、熊本洋学校からの入学組の一人である小崎弘道（明治キリスト教界の長老、のちに同志社社長）は、以下のように回想している。「当時校舎は僅か二棟で、何等設備としてはなく、洋学校より来た者と他に四、五人を除けば、多くは浮浪学生であった。学校には規則もなく、又一定の課程もなく、又生徒取締もなく、宛然昔の漢学塾のようであった。生徒には巡査上がりもあれば、盲人の按摩もあり、何の素養もない輩が宣教師の紹介にて集まり来たのが多いのであるから、其乱脈不取締は殆ど想像の外で、秩序ある洋学校の出身者は何れも驚き、且失望せざるはなかった。」³⁴⁾

「熊本バンド」の青年たちを迎えた同志社は、小崎の回顧にあるように、きわめて乱雑かつ無規則の学園であった。また、教育水準も決してレベルが高いわけではなかったようである。³⁵⁾種々の関係資料を見ると、この時期の同志社を支えたのは、ただ新島というひとりの人格そのものであったということがいえる。熊本から同志社の門を叩いた少年のひとりに、のちの民友社社主、明治の言論界の雄となる徳富猪一郎がいた。彼は76年12月3日に新島から受洗している。彼は80年に同校を中途退学して教会からも退会したが、新島に寄せる敬慕は生涯変らなかつた。

彼は以下のように回顧している。「自分の八十

二年の永き生涯に、真にわが師として念頭に離れざる人は唯一人。それは新島先生である。・・（中略）・・新島先生は必ずしも予に道を伝へたわけではなく、先生は熱心なるキリスト者であったが、予は遂に先生の教へを奉ずることはできなかった。また先生から代数とか、或ひは四福音調和の講義とかいふものを聴いたが、これといて、きまった業を授けられたことはなかった。また惑ひを解くといふ点においても、正直のところ、別段先生によって予が煩悶を癒し、若しくは予の迷蒙を啓いたといふことをも思ひ出せない。いはば先生からこれといて教へたこともなければ、習ったこともなく、聴いたこともなければ、教へられたこともないが、而も真に予は先生以外に先生と思ふ人はいない。」「つまり先生は口が教へずして、実行で教へた。先生その人が予にとっては万巻の書よりも価値があった。先生その人が、予にとっては如何なる大学よりも、より大なる大学であった。」³⁶⁾

蘇峰が在学していたわずか3年間余のふれ合いの中で、新島は、このような感銘を蘇峰に与えたのである。新島は、蘇峰に「大人とならんと欲せば、自ら大人と思ふ勿れ」と説いたとも伝えられている。少年たちの前にあらわれた新島は、まったく飾り気のない、事務員とも見紛うような風采の、若い校長であった。

明治末から大正・昭和にかけて、キリスト教主義にたつ社会主義者として活躍した安部磯雄1865.3.1-1949.2.10も新島の教え子のひとりであった。福岡黒田藩士岡本権之丞の次男として生まれた安部は、海軍軍人をめざして英語習得のため同志社に入学するが、新島から決定的な影響を受け、同級生岸本能武太らとともに新島から受洗した。彼の日記中には、新島との間の魂の交流が、あたかも生ける新島に対するがごとくに記されていたといわれる。1932（昭和7）年の自伝のなかに、次のように記している。「私の眼中には内閣も大臣もない。私が世を去って、新島先生にお会いするとき、先生が、安部さん、よくやって呉れました、と言って下さるかどうか。私にとっては、新島先生からこの一言を賜れば、生涯の意義は完

うされたと思う。」³⁷⁾

ヘボン英語塾、ブラウン英語塾、立教学校のほか、同志社英学校もまた、私塾的色彩を濃厚にもっていた。また札幌農学校におけるクラークの指導のように官立学校のなかに私塾が出来たと表現してもおかしくないケースもあった。このように、いろいろな形で私塾の伝統というものを明治社会の中に受け継ぎ、広めたということはキリスト教主義学校の一つの重要な貢献であった。³⁸⁾

このほか、中村正直、津田仙、岸田吟香、古川正雄、スコットランド一致長老教会の英国人医師フォールズ、H、アメリカのドイツ・ルーテル教会宣教師ボルシャルト Borchard, G. らにより楽善会が組織され、1876年に盲人教育機関として訓盲院が東京築地に設立されたことも付記しておきたい。³⁹⁾

参考文献

- 1) 片子沢千代松「津田真道の基督教国教論」（『基督教史研究』7）1940年 片子沢千代松『日本新教史の研究』、ナツメ社、1957年、10-14頁
- 2) 中山茂『帝国大学の誕生』中央公論社（中公新書）、1977年、47-52頁
- 3) 青山学院編『青山学院九十年史』、青山学院、1965年、237頁
- 4) 寺崎昌男「日本の教育とキリスト教主義学校」立教大学キリスト教教育研究所（JICE）『キリスト教教育研究第2号別冊』1984年、7頁
- 5) 明治学院九十年史編集委員会編『明治学院九十年史』、明治学院、1967年、18頁
- 6) 明治学院編『明治学院百年史』、明治学院、1977年、15頁
- 7) 井深梶之助「宣教師としてのインブリー博士」（『井深梶之助とその時代』）1969年
- 8) 参考文献：井深梶之助とその時代刊行委員会編『井深梶之助とその時代』全3巻、明治学院、1969-71年
- 9) 参考文献：元田作之進編『チング師』、警醒社、1911年 「立教学院最初の総理テ・エス・チング師追懐号」（『築地の園』291）1982年 日本聖公会歴史編集委員会編『日本聖公会教役者Ⅱ』、日本聖公会教務院文書局、1977年
- 10) 海老沢有道「C. M. ウィリアムズ」（『キリスト教学校教育同盟『日本キリスト教教育史人物篇』所収、創文社、

- 1977年) 立教学院百年史編纂委員会編『立教学院百年史』, 立教学院, 1974年, 5-13頁 古い参考文献としては戸川残花「監督ウィリアムス氏」(『太陽』1巻7号) 1895年 元田作之進『老監督ウィリアムス』, 警醒社, 1914年
- 11) 松平惟太郎「聖公会神学院史」(『神学の声』3:1) 1956年
- 12) 日本聖公会歴史編集委員会編『あかしびとたち』, 日本聖公会教務院文書局, 1974年, 20頁
- 13) 同上書木村信一「CMSの日本初期伝道一忘れられた宣教師モンドレルの教育事業」(『桃山学院大学キリスト教論集』5) 1969年
- 14) 『青山学院九十年史』前掲, 23頁
- 15) 同上書, 30頁
- 16) 参考文献; 海老沢亮『教会学校宗教教育史』, 警醒社, 1922年 日本日曜学校協会編『日曜学校のいはれ』, 非売品, 1930年 小出正吾『日曜学校の歴史』, 警醒社, 1932年 山本忠興『日本日曜学校史』, 警醒社, 1941年 高崎毅『基督教教育』, 新教出版社, 1957年 NCC教育部編『日本における教会学校の歩み』, 新教出版社, 1977年
- 17) 自伝に *Cinquante ans d'apostolat au Japon* (Hong Kong, 1923) がある。人物研究として, 池田敏雄『現代日本カトリックの柱石 ビリオン神父一慶応・明治・大正・昭和史を背景に』, 中央出版社, 1965年
- 18) H. チースリク訳『宣教師から見た明治の頃』(キリシタン文化研究シリーズ), キリシタン文化研究会, 1968年, 40頁 小野忠亮『北日本カトリック教会史一人物/教会/遺跡』, 中央出版社, 1970年, 56頁
- 19) 参考文献; 逢坂信吾『クラーク先生詳伝』, クラーク先生詳伝刊行会, 1956年 太田雄三『クラークの一年一札幌農学校初代教頭の日本体験』, 昭和堂, 1979年
- 20) 北海道帝国大学編『北海道帝国大学沿革史』(1926年) には多くのエピソードが収録されている。
- 21) 蝦名賢造『札幌農学校』, 図書出版会, 1980年, 20-50頁 北海道大学編『北大百年史』, きょうせい, 1981-82年
- 22) 麻生誠『大学と人材養成』中公新書221, 1970年, 85-87頁
- 23) D. M. Kenrick 'A Century of Western Studies of Japan' ("Transactions of the Asiatic Society of Japan" Third Series. Vol. 14) 1978 小沢三郎『日本プロテスタント史研究』, 東海大学出版会, 1964年, 38頁
- 24) "First Annual Report of the Tokio Christian Assosiation" Tokio, 1879
- 25) 参考文献; 『東奥義塾再興十年史』, 東奥義塾学友会, 1931年 『菊池九郎先生小伝』, 東奥義塾, 1935年 『東奥義塾九十五年史』, 東奥義塾, 1967年 東奥義塾百年史編纂委員会『開学百年記念東奥義塾年表』, 東奥義塾, 1972年
- 26) G. バスカム「宣教師ジョン・イング伝」『東奥義塾九十五年史』1967年. E. E. Shepard 'A New View of John Ing' "Illinois Magazine March" 1979. F. B. Harris 著, 新谷武四郎「イング婦人を追想して」(『弘前教会百年史ニュース』3), 1975年
- 27) 都田豊三郎『津田仙一明治の基督者』, 私費出版, 1972年, 13-34頁
- 28) 海老沢有道『維新変革期とキリスト教』(新生社, 日本史学研究双書, 1968年) のなかの所収論文「信州上田基督公会の形成」参照
- 29) 井上勝也『新島襄 人と思想』晃洋書房 1990年 第3章参照
- 30) 参考文献; 大久保利謙編『岩倉使節の研究』, 崇高書房, 1976年 小林哲也「理事功程ノート」(『京都大学教育学部紀要』20) 1974年 新島襄全集編集委員会編『新島襄全集, 第1巻(教育編)』, 同朋舎出版, 1983年
- 31) 『同志社九十年小史』1965年, 20頁
- 32) 佐伯理一郎「幕末及明治に於けるアメリカ医師の活動に就いて」(『基督教研究』24.1) 1950年 同志社史料編集所編『同志社百年史』1979年, 25-45頁
- 33) 『新島襄全集 第1巻』, 前掲, 1983年, 6-8頁
- 34) 小崎弘道『七十年の回顧』, 警醒社書店, 1927年, 26頁
- 35) 平塚益徳「日本基督教主義教育文化史」平塚博士記念事業会編『平塚益徳著作集 I 日本教育史』教育開発研究所, 1985年, 69-70頁
- 36) 徳富蘇峰『蘇峰感銘録』, 民友社, 1914年, 76頁
- 37) 安部磯雄『社会主義者となるまで』(自叙伝) 改造社, 1932年, 18-20頁
- 38) 寺崎昌男 前掲論文4頁
- 39) 『東京盲学校六十年史』, 東京盲学校, 1935年, 17頁以下 その他の参考文献; 石松量蔵『盲人とキリスト教の歩み』日本ライトハウス, 1959年 世界盲人百科事典編集委員会編『世界盲人百科事典』日本ライトハウス, 1963-64年 横浜訓盲院『光を求めて90年』, 非売品, 1979年